

東方再興夢（供養）

螺旋階段X—4号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

諸事情により打ち切ったリレー小説の供養です。

目次

「小銃使い」(蝕)	45
「Do you remember?」	
(螺旋階段X 4号)	50
「守矢の社へ」(蝕)	55
「Gloomy Sunday」(螺旋階段X 4号)	58
「You can't decline」	
(螺旋階段X 4号)	62
「Killer Queen」(螺旋階段X 4号)	67
「強き願いは次元を越える」(カイ)	8
「守矢VS刀々神〜異次元の聖戦〜」(カイ)	14
「Have a good time!」	19
(螺旋階段X 4号)	25
「旅の始まり」(蝕)	34
「Don't stop me now」	
(螺旋階段X 4号)	39

プロローグ（シルクハット）

幻想郷、それは楽園。人間界で忘れ去られた物が流れ着く場所。ここでは妖怪や幽霊達が人間と適度な関係を持って過ごしていた。

——春、桜の花弁が参道に落ちていているのを見た私、博麗霊夢は重い腰を上げ箒を持って掃除をしていた。

ここ最近はこれと言つて大きな異変もないし、実に平和な日々が続いてる。暇だが、何かが起こつてほしいと思うこともない。結局私が全部解決しないといけないのだから面倒くさいだけだ。

霊夢 「ん〜…今日も平和ねえ」

あうん 「そうですね〜、でも何か面白いことがほしいです」

霊夢 「そう？私はこのままでいいわ」

そんな他愛もない会話をしていると、空から声がする。彼女はいつも通り箒にまたがってこちらへ飛んできていた。

魔理沙 「霊夢〜！」

霊夢 「魔理沙？なによ、また弾幕勝負でもしに来たの？」

魔理沙「それもまたリベンジしたいが、そんなことじゃないぜ！」

魔理沙は私の目の前に箒を止め、慣れた足取りで箒から降りる。そして私を人差し指で指差し大きな声で告げる。

魔理沙「遂に異変が起こったぜ！」

暫くの沈黙。口を先に開いたのは魔理沙だった。

魔理沙「妖怪の山でずっと、昨日の夜から花卉が降ってきてるんだぜ！」

霊夢「なによ、それ。妖怪の山の桜が散ってるだけでしょ？」

魔理沙「木からじゃなくて空からだぜ!?!これは異変だ！」

私は呆れる。そんなの見間違えだし、あったとしても妖精なんかイタズラでばら撒いてるだけ。春だから皆テンションが上がってるから何時ものことだと魔理沙に告げる。

霊夢「だから私は行かないわよ？異変だと思うなら魔理沙が行ってくればいいじゃない」

魔理沙「分かったぜ！今度こそはお前より先に異変を解決して新聞に載るからな！」

魔理沙はそう言い残して素早く箒にまたがり空へと飛び立つ。一瞬振り返って舌をこちらへからかうように出してきたのはウザかったけど、私は掃除を再開する

……………この時私が魔理沙について行っていれば良かった。面倒くさがらずに異

変を解決しに行けばよかった。だって、幻想郷はこの異変のせいであんなに崩壊したのだから

？

霊夢「っ…」

私は地面に転がり込む。そして、追い打ちをかけるように緑色の髪を持つ彼女は私のお腹を思いつ切り踏んづける。

霊夢「目を覚ましなさい早苗！」

私は彼女……いや東風谷早苗の名を思い切り叫ぶ。けれどその足を退けようとはしない。早苗は光の失った眼をこちらへ向ける。それは見たことのないほど冷酷で、思わず私は身震いする

その瞬間、早苗は霊力をため始める。これは、そうだ、スペルカード。こんな至近距離で当たれば死ぬ事は確実

霊夢「っ!？」

目をつむる。死ぬ、そう確信した。

だが、痛みは何も感じない。私はゆっくり目を開く。目の前には結界。それは見慣れた物だった。

霊夢「これは、紫の……」

紫「靈夢！ボサツとしてないで立ちなさい！」

私は我にかえり直ぐに早苗から離れる。

靈夢「紫、なんでここに……」

紫「……もう幻想郷は崩壊寸前。私は前に言った通り境界で崩壊を止めようとしたけど……」

紫は目を伏せる。ああ、もう……この楽園、いや私達の家は無くなってしまう。途端に涙が溢れて止まらない。私のせいだ、私のせいだ、私がもつと強ければ、私が異変を早く解決していれば。

紫「靈夢」

私は紫の方を振り返る。その瞳からは私と同じように涙が溢れている。

靈夢「……なに……？」

紫「私の力を全て貴女に託す」

靈夢「は……？」

紫「それで、博麗大結界を作りなさい。そうすれば……賭けではあるけど幻想郷が戻るかもしれない。」

靈夢「何言ってるのよ……紫……」

紫「この現象は博麗大結界を誰かが破壊し、現実世界と混ざり合ってこの異変が起

こった。だから、結界をもう一度作り直せば——」

霊夢「そんな話をしてない!!」

私は叫ぶ。紫の肩を持って必死に引き留めようとする。

霊夢「それで結界を作ってアンタはどうなるの!? 魔力を全消費したら死んでしまう事を忘れたんじゃないでしょうね!」

紫は何も言わない。ただ、こちらを見て微笑んだ。その瞬間、体に力が行き渡るのを感じる。直感的に理解する。紫が、私に全ての力を、生命力を渡そうとしているのだ。慌てて離そうとしても決して紫は離さない

霊夢「紫!!!」

紫「ごめんなさい、霊夢。でも……もうこれしか方法がないの。私が幻想郷を愛してやまないのは貴女も知っているでしょう?」

そんな事を言う紫は段々と力が抜けていく。ああ、駄目だ、駄目だ駄目だ。ここままじゃ、紫が、紫が死んでしまう。

紫「霊夢、もしも幻想郷が復活したら——」

『絶対に護って、約束よ』

紫はそう言い残すと地面に崩れ落ちる。

霊夢「……馬鹿じゃないの……」

紫が残してくれたこの力、これで、幻想郷を取り戻す。今度は、絶対に幻想郷を護る。
霊夢「博麗大結界、展開!!」

辺りが光に包まれる。段々と力が抜けていき、私は何時しか気を失っていた――
?――?

魔理沙「霊夢〜!」

その声で私は目を覚ます。目の前には魔理沙の顔があつた。

霊夢「……まり……さ?」

もしかしたらさっきのは何かの夢だったのかもしれない。幻想郷が崩壊するなんて、冗談にもほどがある

魔理沙「遂に異変が起こったぜ!」

その言葉は夢で聞いたもの、その異変の内容は

魔理沙「妖怪の山でずっと、昨日の夜から花卉が降ってきてるんだぜ!」

霊夢「……嘘」

さっきのがもし、予知夢だとしたら、あれは夢じゃなくこの世界は私が幻想郷を取り戻した後だとすれば――

どっちにしる私がこの異変を解決しに向かうのは当然のことだった

霊夢「分かったわ。直ぐに向かうから待つてなさい」

今度は、絶対に幻想郷を、この楽園を、私達の家を護り抜いて見せる。
…続く…

「強き願いは次元を越える」(カイ)

唐突だが、君らは『マルチバース理論』というものをご存知だろうか？

とある自称格闘家から聞いた話なんだが、彼曰く『世界というものは何かしらのきつかけでいくつもの未来へと分岐していく。その数はまさに無限大』との事。詰まるどころこの世界とは違ったパラレルワールドが無数にあるのではないか、そういったものだ。

私作り上げた幻想郷を含むこの世界も例外では無い。

私自身、大元の世界線には行つた事は無いが、聞いた話によるとその大元の世界線は『L1世界群』と呼ばれている。Lの意味は知らないが。

そして私の居るこの世界線は、そいつによると『K2世界群』と呼ばれているらしい。Kは『Knowledge』、つまり知識の頭文字、数字は大元の世界線からどれ程大きく分岐したかのレベルを表しているようだ。

そして今、私はその大元の世界線とも、私のこの世界線とも大きくかけ離れた、新たな世界線の案件に手を出そうとしている。

きつかけは数刻前、アレクが開発した他次元観測装置に信号が引つかかったのである。

私自身、他次元に赴く事は何度もあるが、それはほぼお遊びの為だった。だが今回は訳が違う。

観測した信号はその世界の『幻想郷』が放った救難信号だったのだ。

そもそも幻想郷は紫が張った『幻と実体の境界』と私を含めた賢者達が張った常識の結界『博麗大結界』の二つが張られている。重要なのは後者の方で、これにより幻想郷は隔離されている。

博麗大結界が崩壊した場合、外の世界の『常識』が『非常識』な幻想郷と混ざり合う為、次元に歪みが生じるのだ。

そしてこの結界の崩壊は即ち幻想郷の崩壊を意味する。

幻想郷を愛す者としては当然見過ごせるものでは無く、私はすぐに準備を始めた。そしてアレクの時空転移装置で目的の世界線へと向かう。

転移中に海裏が気になる事を口にした。

海裏「それにしても……博麗大結界は私達ですらそう容易く壊せないものですが……それを破壊したとなると、犯人は相当な実力の持ち主なのですかね……」

ご最もだ。彼の言う通り、博麗大結界を破る事は容易では無い。もし破れるとすれば、ソイツは相当な実力者か、『常識』と『非常識』を弄れる様な奴だけだろう。

海燕「いずれにせよ、まずは現状の把握からだ」

L1やK2とはまた違う世界線……取り敢えず『D3世界群』と名付けておこう。Dは『Dream』、つまり夢の頭文字。深い意味は無い。

D3世界群へと無事降り立った私達。場所はどうかやら妖怪の山の中腹。時間は結界崩壊を観測した少し前。天気は晴れ時々花卉。

海燕「妖怪の山の中腹……なら上まで登って守矢神社で話を聞く事にするか……」

海裏「そうですね……ですが彼女達からしてみたら私達はただの外来人です

どうやって接触を試みましょうか……」

海燕「……『迷った』事にしておこう」

守矢神社に着くと境内を掃除している緑色の髪を持つ少女……東風谷早苗が目につく。

彼女は私達に気付くと一目散に走ってくる。何故か目がめちやくちや輝いている……？

早苗「ようこそ守矢神社へ!! お賽銭箱はあちらです!!」
どうやら私達を参拝客だと思っているらしい。

………真つ先に案内するのが賽銭箱とは……

取り敢えず私達が幻想入りした体で彼女に説明をする。

海燕「わざわざ親切にありがとう……でも私達は参拝客では無いのだよ……
気が付いたら見知らぬ場所に居てね……」

早苗「なるほど……外来人でしたか……ではお賽銭箱はあちらです!!」

海燕「いやいや何故そうなる……まあ少しお金あるし……」

早々に折れた私は取り敢えず賽銭を投げ、お参りする。海裏もそれに続きお参りする。
る。

早苗「ご参拝ありがとうございます!!」

私は東風谷早苗、この神社の風祝を務めています」

海燕「私は刀々神 海燕、万事屋を営んでいる」

海裏「海燕の補佐係の刀々神 海裏です

よろしく願います」

早苗「宜しければお茶でもいかがでしょうか？ 外来人ならこの事もお話しなければなりません」

海燕「そうだな……頂こうか……」

縁側に座り、彼女が淹れたお茶を飲みながら幻想郷について説明（全て知っているが……）を受けていると、不意に声をかけられる。

神奈子「おや、見ない顔だな……お客人か？」

諏訪子「もしかして、早苗の彼氏？」

神奈子「だとすれば二股じゃないか？」

早苗「ち、違いますよ!! 私は一途ですよ!! つて!! 違います!! この方々は幻想入りした外来人ですよ!!」

神奈子・諏訪子「ほほお〜?」

二人して興味深そうに私達を見てくる。一人は背中注連縄が目立つ神、八坂神奈子、もう一人は帽子がトレードマークの土着神、洩矢諏訪子である。

海燕「彼女の言う通り、私達は幻想入りした外来人さ」

私は刀々神 海燕、こっちは補佐係の刀々神 海裏だ」

海裏「よろしくお願ひします、お二人のお話は早苗様からお聞きしました」

神奈子「話が早いねえ……私が神奈子、こっちのちっちゃい方が諏訪子だよ」

諏訪子「誰が豆粒ドチビかーっ!!」

相も変わらず騒がしい神社である。どっかの寂れた貧乏神社とは大違いだな……

神奈子「ところで、さつき幻想入りした外来人と言ったな？」

海燕「ええ……？」

そして、次の彼女の言葉に、私は驚かされる。

神奈子「ならば何故、貴方から私達と同じ『力』を感じるのだ……？」

T o b e c o n t i n u e d

「守矢VS刀々神～異次元の聖戦～」(カイ)

神奈子「ならば何故、貴方から私達と同じ『力』を感じるのだ……？」

神奈子からのカミングアウトに思わず誰もが顔を見合わせる。

続けて諏訪子が喋りだす。

諏訪子「あー、確かに薄々感じてはいたけど……もしかして海燕つて神様なのか？」

そうだ、神奈子と諏訪子は私と同じ神様だった。同族なら自分と同じ神の『力』を感じるのも頷ける。

海燕「そうだな……確かに私は天界出身の神

天界と言っても、比那名居の住む場所とはまた違った所だがね」

神奈子「おや、あの迷惑娘を知っているのか？」

おっと、つい故郷こきょうでの知識が出てしまった。

海燕「ああ……噂くらいは聞いた事あってね……」

諏訪子「へえ？オマケ程度で天人になった比那名居一族の噂をねえ？」

諏訪子がニヤつきながら横槍を入れてくる。コイツら天子に何かされたっけ……？

神奈子「随分面白い奴が来たものだ……どうだ？私達と一戦交える気は無いか？」

早苗「か……神奈子様!?! 海燕さんはまだスペルカードルールすら知らないんですよ!?!」

諏訪子「だ〜いいじょうぶっ

ルールは至ってシンプルだし、コイツにだっつてすぐ扱えるようになるさ」

海燕「随分私を高く買うんだな……」

気で何処まで分かるのかは定かでは無いが、向こうがかなりやる気なようで引く訳にもいかなくなってきた。

早苗からスペルカードルールの説明を受け、私達は場所を変える。

諏訪子「二対一じゃ分が悪いだろう、そっちの青いのも加えても良いぞ?」

海燕「いや、海裏は結構特殊なものでね……私一人で相手させて貰うよ」

神奈子「随分と余裕そうだな」

海燕「そっちこそ……」

早苗から白紙のスペルカードを貰ったが、私自身も故郷^Kで使ってきたものがあるのでこっそりすり替えさせてもらった。

早苗「用意は良いですか?」

海燕「ああ、いつでも」

諏訪子「私達のスペルカードは三枚ずつ、同時に使っていくよ」

海燕「私のスペルカードは一つ、だが十分だ」

互いの準備が整ったところで、早苗が合図を出す。

早苗「それでは……開戦!!!」

開戦早々神奈子と諏訪子がそれぞれ拡散弾を放ってくる。一対一なら対戦した事はあつたが、同時に相手したものはこれが初である。

私は初心者らしく避けるに専念する事にする。

神奈子「避けに専念するか……なら!!」

諏訪子「神社での作法つてのを教えてあげるよ!!」

そして二柱はスペルカードを宣言する。

神奈子「奇祭『目処挺子乱舞』!!」

諏訪子「開宴『二拝二拍一拝』!!」

神奈子のレーザーによる動きの制限と自機狙いの弾幕達、更に諏訪子の二種のレーザーと大弾幕のコンボも相まって非常に避けづらい。

だがそれぞれの対処を知る私は最適解を見つけ、難なくスペルブレイクさせる。

諏訪子「へえ……やるじゃん」

神奈子「でも間髪入れずに……!!」

二柱が続けて次のスペルカードを宣言する。

神奈子「神穀『ディバイニングクropp』!!」

諏訪子「土着神『手長足長さま』!!」

諏訪子の一反射する二種のレーザー弾幕と同時に神奈子が三種の拡散弾を放つてく。流石は犬猿の仲、いや、蛇蛙の仲とでも言うか、見事に息は合っている。

このレベルになると流石の私でも全て躲すのは至難の業となり、数発被弾してしま

う。

神奈子「さつきまでの勢いは何処へ行つたのだ?」

諏訪子「神様ならこの程度避けるのは当然だよ?そんなんじや親が泣くよ?」

私は煽りに流され易いタイプではあるが、私が最も慕っている父の事を出されるのは

流石に堪らん……

海燕「威勢のいい事言ってくれるじゃねえか……ならば見てみるがいい……

これが私の実力だ!!!」

神奈子「そうだ……!!その意気だよ……」

諏訪子「さあ、何処からでもかかってきなよ!!」

海燕「見よ……これがで培った知識と技術の結晶……」

私はスペルカードを掲げ、宣言する。

海燕「複合型：禁忌『495年間のカゴメ・カゴメ』……」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

「守矢VS刀々神く真打の登場く」（カイ）

海燕「複合型：禁忌『495年間のカゴメ・カゴメ』……」
複合型、それは故郷^{K2}で開発した独自スペル。

さとのりの想起スペカみたいなもので、私が過去に見た弾幕を見様見真似で組み合わせた技である。

そして今回のこのスペカは言わずもがな、フランのQ E D『495年の波紋』と禁忌『カゴメカゴメ』の複合である。

相手を囲むように網目状に弾幕が生成され、それが不規則に動き出した後破裂して小さな拡散弾を飛ばしまくる。

諏訪子「これって……紅魔の妹のやつ!？」

神奈子「何故、お前が……!？」

海燕「……風の噂で、ね……」

スペルカードルール初心者と思っていた私が唐突にこんな攻撃をして来るとは流石に思わなかったのか、かなり反応が遅れ数発被弾させる事に成功する。

神奈子「くっ……完全に侮ってたわ……」

諏訪子「やるねえ……これぞ神様って感じ……」

神奈子「だったら私達も間髪入れずに最後の攻撃だ!!!」

そして二柱は再度スペルカードを宣言するが……。

神奈子『風——の特』

諏訪子「祟——『シャ——様』」

突然二柱の声がモザイクがかかったかのように聞きづらくなる。直後、回避不可に近い高密度の弾幕達が飛んでくるが……

……明らかな『殺意』が込められている。

私は咄嗟に弾幕を展開し相殺しようとするも全く歯が立ちそうに無い。

そしてそれに便乗するかの如く、刀を持った少女が弾幕を掻い潜りながら突っ込んでくる。

少女「妖刀『無銘村雨』」

海燕「ぐっ……!!?」

私は咄嗟に腰の二本の刀で受け止めるが、勢いを殺しきれず吹き飛ばされ、二柱の弾幕を多く食らうことになる。

海燕「うあっ……ぐっ……!!!」

海裏「海燕!?!」

早苗「海燕さん!」

異変に気付いた海裏と早苗が来るが、私は即座に静止をかける。

海燕「待て……来るな!!!」

巻き添えを食らうぞ!!!」

ここで幸運な事に、二柱の弾幕が止む。そこには何事も無かったかのように佇む二柱が居た。取り敢えずこっちは何とかなっているようだ。

神奈子「あれ……私達は……」

諏訪子「一体何を……?」

海燕「二柱ともそこを離れろ!!事情は後回しだ!!」

少女「こんな時でも他人の心配とはね……どうせ君は何も守れないのに……」

海燕「誰だか知らんが決めつけは良くないな……!!」

二柱の弾幕に便乗してきた白髪の露出狂……いや、露出度がやけに高い奴……が刀を握り締めて明らかに殺意を向けている。

私は構えをとりつつ話す。

海燕「キミ……一体何者だ?何の目的があつて私を攻撃する?」

少女「君に言う必要は無い

どうせ君に待っているのは『死』のみだしな」

そして少女も刀を握り締め、再度スペカ宣言する。

少女「霊刀『無銘村雨』」

村雨の水に怨霊を降霊させ、広範囲に放ってくる。

怨霊一つ一つの怨念は強く、明確な殺意も込められている為気を抜くと殺られかねない。

怨霊を躲しつつ私も刀の弾幕を放っていくが、相手の動きが余りにも早く全て躲されていく。

少女「この程度？君には少し期待してたのに、ガツカリだな」

海燕「これが私流の戦闘スタイルなのさ……相手の力量を測りつつの………」

少女「霊刀『無銘村雨』」

言葉を遮るかの如く再び降り注ぐ怨念達。コイツだいぶ狡猾だ……

ここで使いたくは無かったが、あの速さに追い付くにはこれしかない。

海燕「仕方が無い、此処で早々に使う事になるとはね……」

幻想郷最速と呼ばれた射命丸に引けを取らない速さの剣捌き、とくと見ろ……」

私はスペルカードを宣言する。早苗達は驚いた目をしているがそんな事を気にしている暇はない。

海燕「刀神『抜く手も見せぬ伝家の宝刀』……」

まさかこんな所で切り札を使う事になるとはな……。

弾幕の壁を生成し、その中で壁に反射しながら不規則に斬り込む。

射命丸に引けを取らない速さで斬りかかり、流星に少女も追いつけないのか、何発かは当てて事が出来た。

少女「くっ……」

海燕「キミの目的は何なのか知らないが、此処は一旦退くことをオススメ……」

少女「うるさい」

弾幕の壁を飛び交う私に対し、少女は村雨を構え正面から受け止める。私の速さに追いついたのだ。

まさか受け止められるとは思わず、私は思わず勢いで後ろに飛ぶ。

それを逃さず、少女が斬りかかってくる。

海燕「まっず……」

海裏「逆刃刀『裏鴉』!!」

間一髪のところでは裏の逆刃刀が村雨を止め、少女は距離をとる。

少女「ふーん……まあいいわ、もう十分分かった」

少女は刀をしまい、去っていく。

海燕「……助かった……のか……」

今、久々に生の喜びを実感した気がする。

安心感からか、疲れからか、不幸にも睡魔に襲われてしまう。

もはや一步も動くことすらままならない私に対し、私の補佐係、海裏が私をおぶり、守矢神社へと向かう。

T o b e c o n t i n u e d

「Have a good time!」(螺旋階段X—
4号)

環境汚染が進んでいない澄んだ川、明らかに手入れされていない大きな木々、空から舞い落ちる花卉、そして電波の通じない最新型のスマートフォン。

「また『飛ばされた』か……」

僕は誰に言うでもなく呟いた。

僕が変な所に飛ばされるのは2回目だ。この現象は神隠しとでも言うべきなのだろう。神様やら妖怪やらが絶世の美女たるこの雨中輝あめなかてるを気に入るのは結構だが、右手のないう少女をこんなところに放り出して一体何がしたいのだろうか。

一度目に神隠しに遭った時はフリーホラーゲームのように脱出のためのヒントが散りばめられた密室だったが、今は知識からしかヒントを得られない森林、それも山中だ。知識といえば火を起こす知識しか持っていない僕にどうしろというのだろうか。

『握る』『開く』の動作しかできない義手では火を起こすのも難しいだろう。

どこぞの錬金術漫画のように自由に動く義手の実現している時代に生まれていればまだマシだっただろう。

「ウダウダ考えても仕方ないな」

重い体をゆっくりと前に持ち上げ、疲れ切った足で地面を踏む。

数十秒前まで寝ていたとは思えないくらいに疲弊している。

数ヶ月前……いや、十数年前からずっと精神的に病んでいるのを加味すれば当たり前なのだろう。体だけでも健康を維持していたが、やはり不健全な精神と健全な肉体だとプラマイマイナスだ。

健全な精神は健全な肉体に宿るというのは間違いだということに気付かされた。健全な精神がないと健全な肉体は得られない。

そもそも、この言葉は健全な精神は健全な肉体に宿りけりというのが正しいらしく、意味としては「健全な精神は健全な肉体に宿ればいいな」といったもので、そもそもただの願望だったわけだ。

と、歩きながら不健全なことを考えている一方、上空には我田引水の天狗が一人。

「この辺りにいるのは……人間？ いや、さっき感じたのは人間の出せる妖力ではなかったですね。ですが——もし、そんな人間が幻想郷に来たのなら、大きなネタになりますね」

後に得た情報によれば、彼女の名前は『射命丸文』（しやめいまるあや）というらしい。

鴉天狗の新聞記者で、博麗大結界とやらが作られる前からこの幻想郷という土地に住

んでいる、所謂古参というやつだ。

一つ断っておくと、『博麗大結界』『幻想郷』という用語や地名は後に得た情報で、現時点では僕は何も知らないか弱い少女だ。

現時点では面識もないこの少女は、この僕目掛けて急降下していった。

自分に向かつて飛んでくる未確認飛行物体によく気付いた僕は思わず腰を抜かして体制を崩し、仰向けに倒れ込んでしまった。

一本歯下駄を、履いた、少女が、飛んできた。背中に、翼が、生えている。

目から脳味噌に飛び込んできた情報が多すぎる。

一度神隠しに遭った身ではあるが、巫人系統は見慣れていない。

「いきなり申し訳ありません。私、新聞屋の鴉天狗、射命丸文と申します。質問ですが、先程の妖気はあなたのものでしょうか？」

飛来してきた彼女は僕が混乱しているのを気にも止めずに話しかけてきた。

「あ、あ、あ、あの……はい」

とりあえず質問に答え、一旦脳を落ち着かせる。

「本当ですか!？」

射命丸文と名乗った少女は目を白黒させて驚く。

ここで僕は今答えた質問の内容をやっと理解した。

この少女、僕を妖怪か何かだと勘違いしているのか？

それはまずい。妖怪やら怪異やらに仲間だと勘違いされたらロクなことにならないだろう。

「あ、いや、違います。僕は人間で……」

「だからですよ！ あんな妖力を宿した人間が外の世界にいるなんて大スクープです！ 取材、いいですか？」

「あ、いや、まあ、いいですけど……」

殺されないだけマシだろう。

好戦的な奴じゃなくてよかった。

「特に右手から強い力を感じますね……触っていいですか？」

むしろそんな力を感じるところを触って不意打ちされる可能性を考えないのだろうか。とはいえ、断るのも無粋というものだろう。

「いいですよ。減るもんじゃないし」

「本当ですか!? ありがとうございます！」

文さんはそう言うのと僕の義手をベタベタと遠慮なしに触ってきた。

この義手は外見や質感は本物と見分けがつかないほど精巧にできている。

手首から下に一本の黒いラインが入っていること以外に不自然なところは一つもな

い。

「うーん、触ってみる限りなんの変哲もない手ですね……そんな力があるとは思えない……内側からは強く鋭い剣のような妖気を感じるんですが……」

「ここまでピンポイントに当ててくるとは。」

「この義手には強力な妖刀が仕込まれている。」

無銘だが、使用者の殺気によって水を放つその性質から『南総里見八犬伝』より引用し、『無銘村雨』と名付けられた。

その妖気とやらは決して僕の方じゃない。強いて言えば、この刀を2兆4000億円で落札した僕の財力が、僕の力だ。

いや、その力も僕のものではないのだろうが。

とりあえず、この娘は安全そうだ。

少なくとも悪意で僕に近づいたわけではないだろう。

「それじゃ、種明かしをしよう」

「種明かし、ですか?」

僕は左手で右の手のひらを掴み、360度回転させた。

すると、肘から手首に伸びていた黒いラインから、白い刃が飛び出す。

これこそ無銘村雨。妖気の正体。

妖気の正体を察したのか、文さんは目を輝かせてカメラのシャッターを切った。

「輝彩滑刀きさいかつとうの流法モード」

と、ふざけてみたが文さんにはあまり通じてない様子だ。

キョトンとしている。『馬鹿じゃねえの』の顔じゃないのは救われたが。

「と、とりあえずよくわからないネタは置いておきまして、次はインタビュです。まず、名前を教えてください。それと、貴女はどうしてこの幻想郷に来られたんですか？」

こんなところ、自分から来た覚えはないのだが……。

とりあえず、この場所が幻想郷ということにはわかった。

「名前は雨中輝。ここに来た理由はわからないよ。神隠しにでも遭ったんだろうね」

「神隠し、ですか……まあ、ありえなくもないですね」

ありえなくもないのか。

どんなところなんだ、ここは。

「次の質問。この刀はどういう経緯で手に入れたんですか？」

「オークションで落札したよ。貯金が消し飛んだけれど、いい買い物だった」

ついでに親に借金もした。

「最後の質問です。実力を私に示してくれますか？」

「実力ウ？喧嘩を売っているという解釈で大丈夫かい？」

だとしたら断るが。

「あれ、ご存知ありませんか？ スペルカードルール」

「いいや、全くわからない」

「それならば、レクチャーしましょう」

「ここで文さんの解説が入る。長いので要点を纏めると

- ・ 殺し合いを遊びに変えるためのルール
- ・ 技を使う回数を宣言する

・ カードの使用を宣言（技名を叫ぶ必要はなく、カード自体にはなんの力もない）し、基本的に『弹幕』と呼ばれる飛び道具を放つ（弹幕である必要はない）

- ・ 体力が尽きるかすべての技が攻略されたら負け

- ・ 戦闘の勝敗よりも美しさに重点を置く

「という勝負です。幻想郷ではかなりメジャーな遊びですよ」

「ここまで聞くと面白そうな遊びだが、一つ気がかりなことがある。

「……死なない？」

「結構死にますね。当たり前どころによります」

「なるほど、まあ格闘技も同じだろうし、軽く一枚でやるか。紙とペンちょうだい。」

「メモ用紙ですが、どうぞ」

僕は即興で技名を考え、スペルカードに記した。

「準備はいいですか？」

「できてるよ」

両者共に紙を取り出し、気合を入れて腹から叫ぶ！

「妖刀『無銘村雨』！」

「岐符『天の八衢』！」

文さんが飛翔してそう叫ぶと、空中に青白く光る玉が文さんを中心として多重の円を描いて出現し、鳥の羽根のようにゆるやかに落ちてくる。

その光景はまるでイルミネーション——いや、星空とでも言うべきか。

そして弾丸の幕と形容できるように威力も高い。玉が当たった木は当たった部分が削り取られている。

この威力の攻撃を自分に直接仕掛けてこない辺り、美しさに重きをおいていることがわかる。

対して僕のスペルカード、妖刀『無銘村雨』は殺意によつて村雨に生じた水を超高速で放ち、敵を切断するという『美しさに重きを置く』という主旨を度外視した技。ついでに『殺意』を抱かなければ使えないという欠陥付きだ。今回は相手が経験者だから殺す気ではないと勝てないだろうからそのつもりで行くし、逆にあの威力の攻撃に当

たれば確実に死ぬ。

格闘技と同じだと言ったのは誰だ。

とりあえず様子見で数発の水を飛ばすが、軽く避けられてしまう。

当たり前だ。ある程度距離がある上に相手は立体的に移動できる。

これを当てるのは無理ゲーというやつだろう。

僕は悟った。

「負けるだろうな……」

続く

「旅の始まり」(蝕)

私は彩花、12年前、腹違いの兄に父親を殺されたので撃ち殺したいこと以外普通の女の子…… なんだけど……

「…… 何処……」

気付いたら知らない場所に居た、見た目から明らかに新東京都第13区じゃないのは確かとして、本当に見覚えが…… いや待って…… 前に何処かで……

—— そうだ、父さんのアルバムにそれらしきものがあつたはず、確か名前は……

「…… 「幻想郷」…… 本当にあつたなんて……」

にしても周りにはちよつと古い感じがする。私みたいにM4SOPMODXI(アサルトライフル)なんて持ってないし……

でも正直に言うとお腹が空いた。手っ取り早くラーメン屋を探そうと思ひ辺りを見渡し、それらしいものを発見した。

「…… 入ってみるか」

腹が減っては戦ができぬ。

昔父さんから教わったことわざだ。

数十分で食べ終わった。

「ふう食った食った……」

そして新しい店だったから、久しぶりにメモを書いた

「チャーシューは塩味が効いており、なおかつ脂が多過ぎず少な過ぎずな適度な配分、麺も硬めで食べやすく、薬味の青ネギとモヤシ、メンマがいい味を出している。ニンニクは少なめで、スープは背脂と醤油、そしてガラスープを使っているからかとてもコクがあり、海苔や味付き半熟ゆで卵も付いていても美味……と……」

しかしここに来たはいいものの、別段やる事が無い。多分クソ野郎（クリシユタール）も居ないだろうし…… とりあえずあそこにある山に向かつてみるか……

山を登っている最中、河で何やら作業をしている少女を見つけた。

「…… あの」

「あ、いらつしやくい、見ない顔だね」

「あくまあ…… さつき来た所ですし…… 所でそれは何を……？」

「あく、機械のメンテだね」

「機械…… えっ機械？」

技術力が一気に向上した…… あれ、ひよつとしてここでマガジンと弾薬を見せれば予備の弾薬作ってもらえるのでは……？

「ひよつとして、こういうの作れたりします?」

試しに弾薬と弾倉を見せてみた

「ん? あ? : : : なんか見た事あるかも」

よつつし行けるよコレ!

「あつでも代金は貰うよ」

ですよね? : : : どうしよ、今ここにはカップラーメン位しか: : :

「: : : : 物々交換つて出来る?」

「ものによるかな」

「えつと: : : これなんだけど: : : 」

恐る恐るカップラーメンをひとつ渡してみた

「お、おとおおお!」

うえええええ!?

ちよ、ちよつと待って! 私何かやらかした!? えつでもラーメン渡したただけで何もしてないはずどうしようどうしよう: : : えつと、あつと: : : あ? : : :

「何これすごく美味しそう!」

「: : : : ふえ?」

「君、これどうやって食べるんだい!」

「あ……え、えつと…… まずこれをこうして……」

カップラーメンと引き換えに弾薬を作ってもらえることになった。めっちゃ驚かれたから反射で逆にこっちも驚いてしまった…… とりあえず1回の戦闘分位はあるから、後で取りに戻る事にして、その場を後にしてさらに進む事にした。

次はどこに行こうと考えている所に、1人の少女が近付いてきた。

「お前、何者だ……？」

髪が白で、頭に……

犬の耳が生えている……

「えっ誰……？」

「妖怪のテリトリーに人間が侵入するな」

「えっ知らないんだけど…… ってちよ!?」

いきなり斬りかかってきた。

危ない、鬼神鋼フレームのM4SOPMODXIが無ければ即死だった……

「ち、ちよつと待ってよ！ 私は戦いに来た訳じゃ……」

「ぬかせ侵入者！」

だめだ話を聞いてくれないどうすれば…… まずい、あまりにもスピードが早すぎる……

「まずい、これ以上は……」

次の瞬間、私の意識は途絶え、気付くと目の前には雪下に倒れ込む切り傷だらけの少女、そして私の手には…… 父さんの形見の刀が…… 刀身に血を帯びた状態であった

「え…… これ…… は……」

私が切ったの？ありえない、私は刀なんて1度も使った事は無いし、基本的にアサルトライフルしか使えない…… はず

ふと腕時計を見ると、いつの間にか30分ほど経過している。少女に近付いたが、どうやら気絶しているだけらしい。ここに放置する訳にもいかなかった為、背負っていく事にした。おそらく山を更に上れば仲間もいるかもしれない。このまま下山するよりも時間がかからない。

しばらく登っていると森を見つけるが、所々木が倒れている。

「何かあったのかな……？」

私はそっちの方に向かう事にした、この子の仲間が居るといいんだけど……

続く

「Don't stop me now」(螺旋階段X—
4号)

「どうしました？あなたの実力はそんなものではないでしょう？」

そんなことア言われても仕方がないだろう。

ただ、ここで降参するのも癪だ。

文さんに一番近い木を射撃して倒すが、やはりすぐに避けられてしまう。

今度は周囲の木をなぎ払って倒す。

その間も僕は光る玉を避けなくてはいけない。

射撃と環境破壊の同時攻撃で文さんを狙うも、やはり当たらない。

だが、木が密集している場所に誘い込めた。

今度はまた周囲の木を一気になぎ倒す。

「あんまり倒すと森がなくなってしまうよ……あれ？」

文さんの視界からは離れることができた。

次は倒れゆく木を駆け上って文さんに突進し、攻撃——

「あれ」

文さんに向けて振るった拳が空を切り、僕は地上に向かって落下していく。

これはまずい。勝ち負けに拘りすぎて攻撃を外した時のリスクを忘れていたし、そもそも当たってもだいたい危険だ。完全に自分の首を絞めている。

しかもやっぱりこれは落ちたら死ぬ高さだ。御愁傷様とでも言うべきなのか？笑えない。

死を覚悟したとき、誰かの手が僕の体を持ち上げた。

「あやや……強いのは貴女ではなく妖刀のほうでしたか」

文さんの手だ。

彼女は初対面の対戦相手を助けるほどには人間ができているらしい。

いや、人間じゃあないんだったか。

「そう言っただろう」

「言ってませんよ」

「言ってなかったね」

妖刀の力を見せたが、自分自身に実力がないとは言っていないかった。

わかるものだろうと思ったが、そうでもないらしい。

「でも、強力な妖刀を手にした人間が来たというのはいいネタじゃあないかい？」

「それもそう……なんでしようがねえ……」

飛んできたネタが『あり得ないほど強力な力を持ち、なおかつ強力な武器を使いこなす人間』ではなく、『強力な妖刀を持っているのに大して強くない人間』だった。期待値が高まりすぎて拍子抜けする現象というやつだろうか。よくあることだ。僕にもよくある。

「少し凶々しいかもだが、このまま山の麓まで降ろしてもらえないかい？」

文さんは一秒ほど間を置き、応えた。

「そうですね、あの子から話を聞いてからにしましょうか」

文さんの進行方向に視線を向けると、何か赤く滲んだ白いものを担いだ少女がいる。

この距離でわかることは銀の髪、黒いパーカー、そして何か長いものを持っていることぐらいか。

そして近づくにつれて担がれているものがどんなものなのかがはつきりとしてきた。

白く短い髪、白い獣耳、赤く染められた白い服の少女。

段々とわかつてくる。あの服は血で染められている。服の切れ目から切創であることは間違いなさそうだ……!!?

「あの子、死体運んでるじゃあないですか!？」

「いや、呼吸はしています。手当てをしないと確実に死にますけどね」

「じゃあ飛ばしてくださいよー！」

「これ以上速度を上げたら飛行中に貴女が死ぬ恐れがありますし、着陸の衝撃でその場の全員がああの世界です。この速度が精一杯です」

無駄口を叩きながら飛行し、ようやく少女の目の前に着陸できた。

「え、あ、は、羽!?!」

「説明は後だ!」

驚愕するパーカーの少女をよそに、僕は白い服の少女に応急措置を始めた。

まずは少女の上着を脱がし、僕が羽織っているコート……は破けそうにない。仕方がないのでコートの下に直接着ている下着の一部を破り取る。

「あ、あの……手の刀でコートを……」

「いいでしょ、下着ぐらい」

とは言うものの、文さんに言われるまで完全に忘れていた。

このタイプの下着は結構伸び縮みするからコートより使いやすいだろうと思っただけだが、割と奇異な行動だったのだろう。

とりあえず次。大きく開いている傷口を縛る。両手、右足、右肩……。幸い、内臓に響くような場所に大きな損傷はない。

最後に、出血している部位を心臓より高い位置に置く……。

「大丈夫かな」

「これは……」

両手を木に括りつけ、無事に集団リンチの現場が出来上がった。

集団レイプとも言うかもしれない。

「あ、あの……ありがとうございませす！」

手当が終わると、少女は泣きそうな顔で感謝の言葉を言ってくれた。

犯罪臭がするこの絵面の中で。

「お礼はいいよ。まあ、この下着をどうにかしてもらいたい気持ちはあるけど、自分でやったことだし。それに……」

胸部から下が全部破り取られた下着を思い出して哀愁を感じながら、気になることを一つ尋ねる。

「この傷、完全に殺し合いの傷だけど……この子に何があつたんだい？」

「えっと、それは……」

「伝わっていないようだから言い方を変えよう。彼女は『スペルカード』を使ったかい？」

スペルカードルール。

それは、『殺し合い』を『遊び』に変えるルール。

逆に言えば、スペルカードを使わない戦いは武道などの『試合』でなければ『喧嘩』や

『殺し合い』と同義。

「つまり、椀……こいつはスペルカードルールを無視せざるを得ない相手と遭遇している？」

「文さん、御名答。それがこのパーカーの子なのか、はたまた他の誰かなのか、だったら誰なのかもわからないが、これだけは言える」

少し間を置き、勿体ぶって結論を出す。

「そんな奴に出会った場合、僕は確実に死ぬ。文さん、僕を守ってくれ」

舞い落ちる花びらの中で、かなり呆れたような顔を向けられた。

続く

5. 56 x 45 mm NATO弾。設計はFN社とレミントン・アームズだけ使っているのは主に使っているのはアメリカ。アメリカの北大西洋条約機構 (NATO) により標準化されてる小火器用の銃弾の1つで、ベースになったのは、223レミントン弾
っという……」

「話が長い」

ついさつき下着を包帯代わりにしていた少女が話を止めた。しまった、ついいつもの癖で話し過ぎた…… 自重しないと……

「ご、ごめんいつもの癖で……」

「…… もうそろそろ再開したいんですが……」

「あっうん」

痺れを切らして話しかけてきた羽の生えた少女の話聞くことにした。

数分後

「なるほど…… そんなものが……」

「だから撃つなよ」

「撃たないよ！緊急時以外は！」

「緊急時は撃つのか」

「そりゃ死にたくないからね！」

「ごもつともだな」

だめだ、ペースが合わない…… コイツと話してたからペースを持つてかれる……
つかしんどい…… 疲れたから休みみたい……

「ラーメン持つてない？」

「無いな」

「無いですね」

「どうしよ…… ラーメン以外食べた事ないんだけど……」

そう、私は生まれてからずっとラーメンだけを食べて生きてきた。他に食べたものは無い。

「そんな人間がいるのか」

「悪かったね…… 訳あって父さんと隠居生活してたの！」

「お前、ファザコンだろ」

「ファザ…… 何？」

「そんなことも知らないのか」

「悪かったね！世間知らずで!!!!」

「おいおいそう怒らないでくれよ、わざとやってるだけだし」

「わざとなんじゃん……」

とても帰りたい。こんな奴に関わつてると精神が持たない

けどあの怪我人を見捨てて下山する訳にもいかないし、そもそもお腹がすいた……

「これくらいしかありませんが…… 食べます?」

羽の生えた少女がもちもちした球体を渡してきた

「…… これなに?」

「団子です。」

食べたことが無い、でも食べないとまずい…… 私は渡されたそれを食べることにし

た

「…… 美味しい……」

ラーメン以外の物を食べた事が無かったから最初のうちは慣れなかったけど、モチモチしていて僅かに甘みもある。こんな食べ物があったなんて知らなかった

「その…… ありがとうございます……」

感謝の言葉を言った後、疲れからか眠くなつて来た。

「すいません、ちよつと休んでいいですか…… さつきまでずっと休み無しで歩き続けてたので……」

「おう、その間にお前の持ち物弄つて」

「その羽の生えた人、見張りお願いします」

「分かりました」

ひとまず休もう、そう思い私は少し眠る事にした

続く

どうせ誰も気にしないなら。

どうせ死んでもいいなら。

どうせいなくなってもいいなら。

どうせ産まれないほうがよかったなら。

こんなもの、捨ててしまった方が――

「――嫌だ……」

首を吊ったはずが、さっきと違って森の中にいる。

目の前にあるのはロープではなく、羽の生えた少女とパーカーの少女が横たわっていた。
いた。

パーカーの少女の名前は聞いてないが……羽の方は射命丸 文さんだったか。
意識が段々とはつきりしてくる。

どうやら、少女が眠っている間に文さんと共に眠ってしまったらしい。

とりあえず僕は体を起こし、体育座り姿勢になる。

それにしても酷い夢だ。親に自殺を促されるような夢とは。

死のうとしたときは本気で止めてくれたし、欲しいものは買ってくれた。僕がオタクでも受け入れてくれたし、仕送りも月に2000万はくれる。

本当に自殺した時にすぐに救急車を呼んでくれたおかげで助かったこともあったっけ。

救急車と言えば、あのボロボロのケモミミは……

「動かないでください」

首に冷たいものが触れた。

もしかしなくても刀剣の類だ。勿論鋭い面が向けられていて、一ミリでも動けばさっきの夢は半分ほど正夢になるだろう。

これは参ったな。この状態から助かる方法は交渉しか知らないのだが、あまり得意ではない。

「これは……両手を上げたほうがいいのかい？」

「手を上げてでも殺します」

「なるほど、大声を上げたら？」

「殺します」

「能力を使っても？」

「殺します」

「致命傷を負った君を下着を破いてまで助けたのが僕だったとしても？」
「関係ないです」

これが恩知らずというものか。

胸から下を全部破いてでも助けたというのに容赦がない。

「……これ、下着なんですか？」

「いい下着なんだよ、これ。破きまくった上に集団レイプみたいな構図に……」

言い終わらないうちに首から生暖かいものが滴る。

やはり脅されているときに下ネタを言うものではない。

「痛いよ」

「当たり前でしょう。これ以上馬鹿なことを言うと殺しますよ」

「君イ、スペルカードルールとやらはどうしたんだい？」

「そのルールで殺しにきておいてよく言う……！」

何がこの娘の気に触れたようで、首にさつきより鋭い激痛が走った。

「い……い……」

思わず僕はうめき声を上げてしまう。

何とか叫ばずに済んだが、本当に痛い。マジで殺す気だ。今のこいつにはスペルカードルールなんて関係ない。

「本当に……やめてくれ、死んでしまう……」

「ならば言いなさい。貴女の目的を」

「なんだそれ、まるで僕が何かしたみたい……」

ここで僕の意識は途切れた。

多分、首を斬られたんだろう。

何も知らずに、何も知らされずに。

ただ、この時、思い出せた。

幻想郷にたどり着く前の——

——死の感覚を。

続く

「守矢の社へ」(蝕)

起きたらついさっきの少女とかが居ない、羽の生えた人は居るけど……いや、人なのかなこれ

「あ、起きましたか」

「…… さっきの人達は？」

「さっき椀に下着で応急処置をしていた人は椀に連れ去られましたよ」

「椀…… あ、あの人？」

一瞬誰か分からなかったが、応急処置をされていたと言うことから多分私に襲いかかって来たあの少女の事だろう

「つていうかそれ大丈夫なの!？」

「多分大丈夫ですよ…… 多分」

不安だな

「とりあえず川のところのエンジニアに頼んでたものを取りに行つてきますね」

「川のエンジニア…… あ、河城にとりさんのことですか？」

どうやらあの青髪の人「河城にとり」という名前らしい

「そういえば私もひとつ頼んでましたね」

「じゃあ一緒に行く?」

「そうしましょう」

という訳で私はしばらくの間「射命丸文」さんと行動を一緒にする事になった。名前は歩いてる間に自己紹介し合って聞いた。どうやら烏天狗で新聞記者…。?らしい

「新聞つて何?」

「あ、ご存知ありませんか? まあ簡単に言うと色々な情報が書かれている紙ですね」

「なるほどお…」

初めて知った情報かもしれない

そんなこんな話している間ににとりさんの所に着いた。

「お、きたきた、出来てるよ」

私は頼んでいたマガジンを、そして文さんはカメラ用のフラッシュを貰った

「何それ」

「フラッシュと言つて…。暗いところでも明るく撮影する為のものです。粉みたいなのを使って発光させる仕掛けだったと思います」

「なんか聞き覚えが…。あつ…。そうだ、追加で頼んでいい? カップラーメン渡すから」

「発光」、「フラッシュ」という2つの単語を聞いて軍専用で使われている二つの道具を思い出した。1つはフラッシュライト、そしてもう1つは閃光手榴弾、フラッシュバンとも呼ばれているものだ。

「コレでよしと…。」

フラッシュライトは直ぐに作れたようで、すぐに手に入ったので、SOPMOD XIのレールに取り付けた。

「これは…?」

「フラッシュライト、フラッシュの永続版みたいなものだよ」

「さてこの後どうしよう」と考えていると、ぽたぽたと雨が降ってくる

「あつやべ…。」

私のパーカーとかりユックは防水防塵性だけど、M4 SOPMOD XIに付けたフラッシュライトはそうでも無い。

「何処か雨宿り出来る場所となると…： 近くに守矢神社がありますね」

「じゃあそこに行こう」

こうして私達は守矢神社に向かう事になった

「Gloomy Sunday」(螺旋階段X—4号)

見渡す限りの暗黒の中に、ぽつりとひとつ、何か吊るされているのが見える。あれはなんだろう。あまり良いものには見えないが、気がかりではある。

僕は一步、また一步と足を踏み入れて暗闇を進んでいった。ある程度近づくと、それが何かはつきりしてくる。

吊るされているのは女の人だ。

いや、足元に台が転がっているのを見るに、首を吊っているように見える。急いで助けなければ。

僕は必死で足を動かし、そこにいる人をロープから降ろした。

降ろしたあとは心臓マッサージをするんだったか。

彼女を仰向けの状態にすると、僕はあることに気付く。

こいつは、僕と同じ顔をしている。

「なんなんだ………こいつは」

とはいえ、数秒前まで首を吊っていた人間を放っておくわけにはいかない。

胸に手を当て、一定のリズムで圧をかける。

人工呼吸も忘れてはいけない。最初が自分の顔というのは中々変な感じだが、とにかく続けなければ。

しばらく続けていると、彼女はやがて息を吹き返し、起きるなりこう言った。

「やめてくれ。もう生きるのが嫌なんだ」

「かといつて、放っておけるわけがないじゃあないですか!」

「……………やつと、抜け出せたんだ」

「抜け出せた?」

「君からに決まっているだろう」

目が覚めても、また森林にいた。崖から先にはまさに幻想的な景色が広がっている。

また、夢を見ていたようだ。

景色がいいのは結構だが、酸素が薄いのか息苦しい。

思わず「げほっ」と咳を漏らしてしまい、その勢いで胃の中にあるものを外に出してしまいそうなほど気分が悪く、目眩も酷いし、疲れも酷い。

高山病なのだろう。一刻も早く下山したいが、両手の自由が効かない。この場に縄か何かで括り付けられている。

「目——よ—だね」

声のする方を見てみると、何かが立っていた。

聞く限り人の声なので恐らく人だろう。

「助^{助けて、苦しい}——し——」

僕はそれに助けを求める。

「へえ、——しの部——を殺そ——と——、自——されたらいの——か?」

意識が朦朧として何を言っているのか分からない。

部下を殺そうとして……? 何のことだ?

「身^{身に覚えがない}に——え——い」

「わ——お——えている」

言っても聞かないのなら、実力行使……という手段を取ることもできないのが現状だ。

両手が使えない上、使えたとしても酷い高山病だ。今の僕には5歳の少女が指一本で

挑んでも勝てるだろう。これぞ八方塞がりで絶体絶命のカタストロフィだ。

「助^{助けてくれ、何でもするから}——てくれ、——するから」

「——、——も?」

よく聞こえなかったが、言葉を察して僕はゆっくりと頷く。

すると、目の前のそれは僕の口の中に何かを入れる。

飲め、ということなんだろう。

無警戒にそれを飲むと、目の前のそれに縄を解かれ、解放され……てない。

立ち上がろうとしても酸素と血液が足りず、その場に突っ伏してしまう。

体に力が入らない。

「こうなれば頼むことは一つ。

何でもするから下山させて

「何で——か——ぎ——て」

続く

「You can't decline」(螺旋階段X—4号)

高山病で死にかけたため、僕ら二人とケモミミの娘は山の麓にいる。

ケモミミの娘は『犬走 椀』、もう片方の青髪の娘は『飯綱丸龍』と言うらしい。

そして僕の高山病は何とかマシになったが、貧血のまままで辛い。

花卉がまだ舞い落ちる中、椀ちゃんは龍さんの説教を受けている。

「こんな雑魚相手に殺されかけるとは……椀、お前最近弛んでるんじゃないか？」

「すみません……ですが、こいつは完全にスペルカードルールを無視して殺しにかかってきたんですよ？」

「それでもだ。こいつが殺しにかかってきたところで、負けることはないはずだ」

「随分言いたい放題言ってくれるようだけど……えー、椀ちゃん」

丁度、『椀ちゃん』という言葉を発した瞬間に椀ちゃんが物凄い形相で僕を見てくる。

「……椀さんを殺そうとした覚えはないし、むしろボロボロのところを高い下着破いてまで助けたんだけどね。感謝こそすれ、あんなことをされる理由はないんじゃないか？」

「黙れ露出狂」

「そう思うんなら下着をくれ」

「そこで下着を要求するから露出狂なんですよ」

一理あるかもしれない。

「だけどボロボロになった椀ちゃ」

うっかりと『ちゃん』をつけてしまい、また凄まれた。

数秒の間を置き、話を続ける。

「……椀さんが僕の下着を手足に巻きつけていたことは揺るぎない事実じゃあないか。

興奮しない?」

「殺しますよ」

「そんなに興奮しないでよ。それとも、もしかしてリヨナラーとかネク……」

言い終わらないうちに首に刀を突き立てられた。

嫌いな人の口から発される下ネタほど不快なものはないのだろう。

「本気ですよ」

「すみません」

「……………」

「……………」

「……………」

数秒の沈黙のあと、話を切り出したのは龍さんだ。

「それで……お前は何故棍を殺そうとしたんだ？仲は悪そうだが、お前自身の口ぶりからは棍への憎悪は感じ取れない。それどころか仲良くなろうとしているようにも見えらる。とても下手だがな」

「何度も言うけど、そんなことはしていない。そもそも、初対面で殺そうとしてきたのは向こうのほうだ」

正直に答えたが、龍さんの表情はより一層険しくなった。

「本当なんだな？」

「当たり前だ」

龍さんの顔は困った風な表情になる。

彼女は数秒考えた後、妙なことを口に出す。

「お手」

龍さんは右手を差し出し、犬にするような命令を下した。

「何を？」

左の手のひらで何かに触れるのを感じた。

体温を感じる。これは……肌？

『それ』の上をなぞってみると、五つほど枝分かれしている。

「……何触ってるんだよ」

「え？」

「何してるんですか……」

僕は自分の知らないうちに『お手』に従っていた。

無意識のうちに。

「蓬莱人に作ってもらった薬だよ。これで私に逆らえないってわけだ。お座り」

こいつ、とんでもないもの飲ませやがったな。

視線がガクンと下に落ちる。フリーフォールみたいで気持ち悪い。

「原材料はヤモリの黒焼きと椎の実、そして薬品その他諸々だ。ほれ、指を啜えてみる。

噛みちぎるなよ」

「あもいヤモリのくおの黒や焼きき……ほえぐふいひやええかか」

「何させてるんですか!?!……何やってるんですか!?!」

権ちゃんはホラー映画でも見るような目でこつちを見てくる。

僕も怖い。

「大丈夫。お前なんかに変な気は起こさない。……汚いからやめろ。やめたら飲み込

め」

自分でやらせたんじゃないかと思いなながら涎を飲み込み、言葉を吐き出す。

「はあくく、それならさっきの発言が本当ってことでもいいんじゃないか?」

「効果を試していなかったからな。まあ、今ので信用できたよ。椀、帰るぞ」

「え、ええ!」

そう言っつて龍と椀は山の中に帰っていく。

依然として、山には花卉が降っていた。

続く

「Killer Queen」(螺旋階段X—4号)

ふらふらと山の麓を歩いていると、一つの紅い洋館が見えてきた。

それは『お化けが出る洋館はこういうものです』と示すように絵に描いたような雰囲気、とても美しく、それでいて不気味な感じがする。

それが本当なら貧血の人間が入ったら確実に死ぬだろう。

一秒で化け物の餌確定だ。

青鬼もそんな奴が来たら大いに喜ぶだろう。

僕だったら空腹の状態で弱った生き物が目の前にいたら迷わず食べる。

この話は現実ならただの馬鹿馬鹿しい冗談だが、ここは天狗や獣人(椀ちゃんも天狗らしいが)がいるような場所だ。

化け物が出てきても特段驚くことはない。

「ただ、他に行く宛もないしなあ」

洋館に化け物がある可能性を加味しても、ここを去った後に貧血で死ぬのが目に見える。

入った方が生存率が高いに決まっているだろう。

そういうわけで僕は門を探すため、弱った足で岩のように重い体を引き摺っていった。

しばらくするとやはり門のようなものが見えてくる。ただ、チャイナドレスのような服装の少女と一緒に。

少女はこちらに気付いたのか僕の方に目をやると、少なくとも健康ではないのを察したように顔色を変えて駆け寄ってくる。

「大丈夫ですか？」

僕は荒くなつた息を整え、声を振り絞る。

「すまない。貧血で……」

言い終わらないうちにうっかりと気が緩んでしまい、また意識が途切れた。

「君は誰だ？」

目の前に僕がいる。

「君は僕か？」

いや、僕ではないはずだ。

「本当にそうか？」

僕がもう一人いるのならば、『迎る人生』は違うものだ。

『人生』が違えば『人格』は変わる。

目の前にいる僕は、僕ではないだろう。

「でも、過去は全く同じだ」

そうだ。過去が同じなら、現時点では同じ人間と言わざるを得ない。

だが、今この瞬間、二人いる。

君は僕じゃない。僕は君じゃない。

「でも、僕も同じ未来を辿ったらどうなる？」

その可能性はあり得ない。

違う世界……並行世界とでも言うべきか。そういった場所にいなければ、君と同じ未

来を辿ることはあり得ない。

しかし、現に君はここにいる。

「可能不可能じゃなくて、結果の話をしている」

それならば、議論する余地はない。

君はどうしても僕を論破したいようだが、意味のない議論に価値はない。

僕は帰らせてもらう。

「そうしたいならそうすればいい。今答えを出す必要はない」

君は何が言いたいんだ？

君は何をしたいんだ？

何故僕に問いかける？

のちに答えを求めることが必要とでも言いたいのか？

「いづれ——」

目を開けると、かなり豪華な部屋にいた。

天井や壁にはシャンデリアが飾られていて、床を見ると綺麗なカーペットが敷かれている。
いる。

ベッドもふかふかで気持ちがいい。ここにくる前はそう珍しいものではなかったが、珍しさはどうであれ良いベッドは一度入ると二度と出たくなくなる。

体も羽が生えたように軽く、腕ぐらい吹き飛んでも治りそうなほど調子がいい。

もうちよつと具体的に言うのと、樹齢千年を超える大木を持ち上げることでもできそうな

ほどに元気だ。

「とは言っても、比喩以上の何物でもないけどね」

と独り言を呟いて、コートに羽織つてドアノブに手を掛けて捻り、内側に引く。すると大きな音が鳴った。

何が起こったのかを確認するのにそれほど時間はかからなかったが、理解するのに数十秒を要するような光景が目の前に飛び込んでくる。

僕は思わず腰を抜き、尻餅をついてしまう。

簡単に言うけどドアが取れた……というかドアが割れた。いや、壊れた？

「あら、これは大変」

音を聞きつけたのか、後ろからあつさりとした声が聞こえた。

ドアがぶつ壊れたのにあまり動揺していない様子から、この館はこれを普通だと思える程度にはおかしいらしい。

見てみると、銀髪で三つ編みのメイドがいる。『これがメイドです』みたいなメイドだ。

「大丈夫？怪我はない？」

「大丈夫。それで、これは捕まったとかそういうわけじゃないよね。こんな美少女捕まえたらワシントン条約に引っかかるよ」

「ああ、軍帽被った露出狂は生類憐れみの令だあね」

乗ってくれた。

真面目そうな雰囲気反して案外ノリはいいようだ。

「で？どうして貧血なのに吸血鬼の館なんて来たの？あなたもこの館に雇われたのかしら？」

「へえ、吸血鬼の館ってわけね。案の定予想的中計画通りってわけだ」

「あなたが何を計画してるかは知らないけど、ここで馬鹿なことはやめなさいよ」
吸血鬼。

『ブラム・ストーカー』の小説『吸血鬼ドラキュラ』を皮切りに世界で大きく広まった『怪物』で、日光に弱い、絶大な力を持ち、夜間にそれを振るうと言われる。

設定は結構曖昧で、日中に能力を使えないだけだったり、そもそも日光が平気だったり、究極生命体の副産物だったりするものもある。

ただ、一つだけ確かなことがある。

「瞬間移動ができるような吸血鬼相手に何かできるほど強くないから、安心して」

「私は人間だし、これは時を止めただけ」

「おっと、失礼」

もっとおかしい。

メイドが時を止めるなら、ご主人様は運命でも操れるのだろうか。

「それと、ご主人様にお礼も言っておきなさい。ご主人様が貴女に血を分けてあげたのよ」

「あ、そうだったね。ではこの主人のところにあんまりしてくれないかい？それと、扉の方はどうしたらいい？今は文無しつてやつだから皿洗いでもやろうかい？」

「大丈夫よ。この程度すぐに直せる」

メイドさんがそう言うと、扉は完全に修復されていた。

「今のも時を止めたのかい？」

「直す時まで時間を進めたの。それで、案内に関しては別にいいけど、失礼のないように」

「命の恩人に対して無礼は働かんよ」

「では、どうぞ」

今度は視界の場所が別に移る。

「ここはさつきとは別の個室の前のようだ。『コンコンコン』とノックすると、中から声が聞こえてくる。

「入りなさい」

それは紛れもなく10歳前後の少女の声だが、艶やかな色気があり、それでいて品格

を感じさせる。

「失礼します」

声に従って部屋に入ると、聞こえた声の雰囲気にならず、そこには幼い少女がいた。ふわふわとした『お嬢様』的な衣装を身に纏っており、そこには幼いながらも何か美しいものがある。

そして背中にはコウモリの羽のようなものが生えており、僕に彼女は『吸血鬼』なのだろうという確信が芽生えた。

部屋の調度品はさっきの部屋より一層豪華で、いかにも『主の部屋』の上品な部屋だ。綺麗……。

「あら、もう目が覚めたのね。腕の方は治せなかったけど、すっかり元気になったでしょう？ それと、吸血鬼の力を使えるようになってるでしょうけど、1時間も使えば効果が切れるから安心して」

やはりあの力は吸血鬼の力というわけか。

何にせよ助けてくれたんだ。感謝しなければ。

「はい、貴女のおかげで助かりました。本当にありがとうございます。僕は雨中輝と言いますが、貴女のお名前は？」

「レミリア・スカーレットよ。感謝は私じゃなくて美鈴にするのね。彼女がいなかった

ら貴女は門の前で死んでいたわ」

美鈴……門の前にいた人か。

あの人にもお礼を言わないと。

「はい、でも、輸血してくれたのは貴女でしょう？……そうだ、指舐めましょうか？」

「は？」

「え？」

「……………」

「……………」

僕は何か今おかしいことを言ったか？

「いや、なんで私が貴女に指を舐められないといけないの？」

「僕みたいに可愛い娘に指を舐められたら喜ぶと思ひまして」

「相当自分の顔に自信があるのね。可愛いのは否定しないけど、誰もが指を舐められて

喜ぶような人ってことじゃないのは頭に入れておきなさい」

レミリアはくすつと笑い、こう言つて指を差し出してきた。

「貴女が喜ぶなら、させてあげても構わないけど」

続く